

受講番号 18076 学校名 安田中学校 氏名 中山 真矢

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 第2学年 生徒数 21 名
 科目名 第2学年 単位数(授業時数) 3 時間 使用教科書名 SUNSHINE ENGLISH COURSE 2 (開隆堂)

クラスの様子・特徴

今年度より少人数授業を導入し、昨年度は授業に集中できなかった生徒も授業に参加するようになり、全体的にも英語学習に対する関心が高まり、落着いて授業に取り組んでいる。しかし、その日の気分により、授業に集中できない生徒が数名いる。

問題の確定

わかる授業を心がけ、生徒の学習意欲を伸ばし、生徒が伸び伸びと授業を受けられるような授業づくりをする。

予備調査

A 授業の観察

少人数指導のせいあってか、昨年度に比べ全体的に授業に意欲的に取り組めるようになった。しかし、数名の英語嫌いの生徒が授業に集中できず私語が多くなる時があり、他の生徒が落ち着いて授業に集中できる環境にない時も度々ある。

B 生徒による授業評価

4月当初のアンケートにより、わかりやすい授業よりは、発表しやすく集中できる環境で授業を受けたいと思っている生徒が半数いた。またつけたい力として、半数以上の生徒が「書く力」を挙げている。

C 学力データ

CRTの結果より(4月)
 領域別に見てみると、「聞くこと」「話すこと」は全国平均並みである。「読むこと」では全国平均を多少上回っている。しかし、「書くこと」においてはやや下回っている。

リサーチ・クエスチョン

英語の語順を意識させ、「書くこと」の表現力を高めるためにはどのようにすればいいのか。

仮説・実践・検証

仮説1

毎時間、授業の冒頭10分で、新出文型を用いた文を練習することにより、自然と「書くこと」に慣れ、自信を持って文を書けるようになるだろう。

実践1

授業ノートとは別に自己表現ノートを用意させた。また、よく使う動詞、名詞、形容詞の一覧表を配布し、活用させた。
 自己表現ノートに、毎時間、新出文型を用いた和文英訳を3文(異なる主語、時制の文)を作る練習をさせた。時間内で3文書き終えた生徒には上記の一覧表を参考にどんどん自分で文を作らせた。1学期間で150文を目標にさせ、評価した。

検証1

昨年度はほとんどの生徒が単語のつづり間違いをしていたが、同じ表現(一覧表より)を使うことにより、つづり間違いをすることなく単語を書けるようになった。また、「書くこと」を非常に嫌がっていた学年であるが、「書くこと」にも慣れ、自分で文をどんとどんと作ることができるようになった。7月、12月にとった生徒アンケートによると、ほとんどの生徒がこの取り組みが役に立ったので、今後も続けてほしいと思っている。

仮説2

常に英語の語順を意識しながら、文を読んだり、書いたりすることにより、文型の理解と定着が容易になるのではないかと。

実践2

文を作るときや本文の内容理解のときに、「誰が」「どうした」と常に問うようにし、基本的な文の語順を意識させた。
 また一般動詞とbe動詞の文を大きくパターン1、パターン2の文として分類した表を、常に目に入る教室の前の壁に掲示した。文の作り方や、意味がわからなくなったときは、それに注目させ語順を意識させた。

検証2

7月のアンケートでは、実践2の取り組みが語順を理解をする上で役に立ったという肯定的な意見を持っている生徒は半数であったが、12月のアンケートでは、その意見はさらに多くなった。しかし、語順について理解できている生徒は少ないように思われる。さらなる深い指導が必要である。

仮説3

「身近な話題」をテーマにすれば、生徒の書くことする気持ちを高めることができるだろう。
 新出文型を用いた文を練習するときに、既習事項を用いた文をもう1文付け足すことにより、さらに詳しく深い内容で表現できるようになるのではないかと。

実践3

新出文型の導入時は、できるだけ身近な話題から入り、英語で提示していくことを指導者が心がけた。また定期テストや選択の授業を利用して「修学旅行の思い出」「次の日曜日にすること」「自分の将来」など、自分について書かせるような課題を定期的に課した。その際、新出文型だけではなく、既習事項もからめた例文を記載し、まとまりのある文を書くお手本とした。

検証3

例文を記載したためか、単語を変えるだけで、文の形式は例文と全く同じもので書く生徒が半数以上いた。自分の書きたい文を例文なしで書ける生徒は数名しかおらず、他の生徒に対して十分な力をつけることはできなかった。定期的に課題を課したが、回数は少なく、やはり例文を提示しただけでは不十分であった。今後は提示だけではなく、生徒がより深い内容で表現する練習を、少しずつ計画的に行っていくと考えている。

研究の成果

大きな成果として、ほとんどの生徒が自分の力で英文を組み立てることができるようになったことが挙げられる。昨年度は和文英訳の問題は数名の生徒しか正確に書くことができなかったし、問題に取りかからない生徒もいた。単語もうる覚えでつづり間違いがたくさん見られた。しかし、毎時間の和文英訳の練習で決まった表現(一覧表より)を使うことにより、単語のつづり間違いをせず、また文を正確に書くことができるようになった。生徒からも、昨年度に比べ、自信を持って単語をつづれるようになったし、文を作ることにおいても難しいと感じることが少なくなったという声が聞かれる。語順指導においてはまだまだ指導がいるが、少しずつ語順を気にしている生徒が増えてきた。

今後の授業改善の課題

仮説1の取り組みにより、「書くこと」に慣れ、与えられた日本語を英語にすることはできるようになったが、ただの和文英訳をする力だけに留まってしまった。今後は選択の授業を利用し、さらに深い内容で表現する方法や、まとまりのある文を書かせる指導を行い、それらを十分に練習させる時間を取りたいと考えている。また常に、1文だけで終わらせずさらにもう1文を付け足すよう、意識づけを行う授業づくりをしていきたい。